

Theatre & Policy

通巻第 58 号 2009 年 12 月 20 日発行

演劇とソーシャル・ワーク。
概念として、近いようで遠い。
手法として、遠いようで近い。
ところが、見えにくい場所で、どうも密接に関わりあっている。
その見えにくい場所のいくつかをご紹介します。
そこには役割の限定と確かな専門性が見えてきます。

インタビュー

劇場に働くドラマ・セラピスト

そもそも演劇が福祉・医療分野にかかわることに對して、演劇界に根強い抵抗があるなかで、英国に唯一、劇場にフルタイムで勤務するドラマ・セラピストがいる。スコットランドの第四の都市ダンディの地域劇場ダンディ・レップ・シアターに勤務するマギー・ムーア女史である。

ダンディ・レップの本拠地ダンディ市は、産業構造の変革に乗り遅れただけでなく、都市計画の失敗もあつて、多くの失業者と貧困層を抱え、ドラッグのみならず、若年層の自殺率、十代の妊娠率、精神病罹患率の高さはしばしば大きな社会問題として認知されてきた。その対策の一端を、地域劇場が自治体や諸団体の委託もあつて担ってきた。それ自体はいまの地域劇場の「コミュニティ」への関与として決してめずらしいものではないが、フルタイムのドラマ・セラピストを置くというのはとりわけ異彩を放つ。欠員時期もあつたが、十四年以上の歴史を誇ることに驚きを禁じ得ない。

対象は、十六〜六十五歳の、いわゆるメンタルヘル스에問題を抱えている大人たち。家庭医（GP）、ソーシャル・ワーカー、コミュニティで精神医療に携わる看護師などを通して、また直接、本人から劇場へコンタクトすることで、この「ドラマ・セラピー・サービス」を享受できる。資金は地域のナショナル・ヘルス・サービスとダンディ市ソーシャル・ワーク部から提供されているため、すべてのサービスが無料で提供されている。

二〇〇九年二月から、この稀有な劇場付きのドラマ・セラ

ピストを務めているのが、マギー・ムーア女史である。もともとスコットランド出身だが、ロンドンの名門演劇学校ローハンプトン・インスティテュート（現在はローハンプトン大学）で演技を学ぶ。学生時代にドラマ・セラピーの存在を知ったというが、卒業後しばらくは俳優として活動。だが、次に、自身の活動に社会的な役割を求めて、ドラマ・セラピストへの道を模索しはじめる。

新しい分野だけにわかりにくさだけでなく、混乱もある。「サイコドラマ」と「ドラマ・セラピー」の差異は、悩ましいものとして、英国でも長く議論が続けられているという。また、ドラマには癒す機能があるという言葉で整理されてしまふと誤解を生じやすい。自己の傷ついた内面を見つめなおすというよりも、自らの感情や行動を「多角化・身体化」することで「獲得する」という側面が強いからだ。感情を表現するために新しいスキルを学ぶ、行動のパターンを自ら認識する、他者とかかわる、一つの事象を様々に異なるアングルから見られるようにする等等、多分に能動的な活動である。実のところ、ドラマやシアター教育と何ら差異はない。だが、たしかに存在する差異は、その担い手に求められる大学での心理学、芸術あるいは教育関連の学位と、大学院レベルでのセラピストとして資格、さらに専門職として働いていく際につきつけられる極めて厳しい規範である。傷ついた人を救ってあげたいという正義感や純粋な思いだけでやれる仕事ではない。



実際のムーア女史の仕事は、毎週水曜日の「グループワーク」のセッションに加えて、要望・必要に応じて、個別のセラピーを行う。また劇場以外の場所での活動も少なくない。自らセッションを担うこともあれば、(スコットランドには未だドラマ・セラピストは少ないが)他のセラピストとの協働もある。クライアントのために病院や関係機関との連絡や調整はなによりも大切な仕事の一つだ。資金調達のための事務作業も膨大なものになる。

本来、病院や学校、施設にはりつくことの多いドラマ・セラピストが劇場にいるという環境の利点は、「同じセラピーを受けるにしても、病院や関連の施設に行くよりも、劇場に行く方が周囲の目を気にする必要がない」という女史の言葉に集約される。クライアント個人の尊厳を守れる。また、資格をもつ個人としてのドラマ・セラピストとしてより、ダンディ・レップという地域で確立した組織の名前の存在が、ドラマ・セラピーという比較的新しい分野への抵抗を引き下げるようになっていないのではないかと語る。

劇場としても社会貢献というだけではない、様々なメリットがある。プロフィールを豊かなものにする。演劇の面白さを知ってもらい、それが観客へと、さらにはサポーターへと育ってくれるかもしれない。ダンディ・レップとしての野心は、エデュケーション部門を再編した「クリエイティブ・ラーニング」に加えて、未来の演劇業界を担う人材育成のための新規に着手したプログラム「クリエイティブ・デイベロップメント」を統合し、発表させていくことである。これまで地方都市だからできなかったことを、地方都市だからこそできることに変えていく、そのためのインタラクティブな創造的解決のあり方の一つがこのサービスである。(中山夏織)

クラウンの遊び心が福祉の場を変える

加島 博美

一九九八年にロビン・ウィリアムズ主演の映画「パッチ・アダムス」が一世風靡し、「病院を訪問するクラウン(ホスピタル・クラウンまたはケアリング・クラウン)」は、世界中で一気に注目されるようになった。

そのパッチ・アダムスは実在し、医者として、かつ、クラウンとして、『ユーモア』を医療に持ちこみ、ユニークな活動を行なっているのだが、日本においてはその実態を知る人はまだ、少ない。「ホスピタル・クラウン」「ケアリング・クラウン」という言葉を聞いた時、日本ではいったい何人の人がその存在をはっきりと頭に浮かべることができるのだろうか？

クラウン、つまり道化師はどの文化のどの歴史にも存在したといわれる。古代エジプトや、紀元前三〇〇〇年のネイティブアメリカンの歴史にもトリックスターの存在が記されている。病気を治したり、預言者であったりと、ある種魔術師のような役割であった。十一世紀の半ば頃から、中世ヨーロッパでは、王侯貴族を楽しませる存在として、宮廷道化師が登場する。愚者として珍重され、君主に無礼なことが言える唯一の存在でもあり、社会的なタブーまでを見事に覆す存在であった。十六世紀の半ば、イタリヤの古典仮面劇コンメディア・デッラルテとともに、クラウンが舞台上で登場する。俳優たちが類型的なキャラクター(ストック・キャラクター)を即興的(ラッツイ)に演じ、物語を展開していく。言葉の違いを埋めるため、個性的な仮面をつけ、時にはパント

マイムやジャグリング、アクロバットなどの身体表現も交えて演じられた。

こうして舞台上で活躍した後、十九世紀に入って、クラウンはサーカスに登場するようになる。二十世紀になって、アメリカのサーカスが、ショーを効果的に見せるためにクラウンを使うようになる。幕間の道化役だけではなく、プレショーで期待感を高めたり、ゲート前でお客様を呼び込んだりして、サーカスと観客を繋ぐ『つなぎ役』として期待がかけられた。

そして、一九八〇年代、病院を訪問するクラウンがアメリカで登場する。代表的な四人のクラウンたちがそれぞれにプログラムを立ち上げたのが始まりである。

病院でのクラウンを創始し世界的に広がるきっかけをつくったのが、先に述べたパッチ・アダムスである。その他には、特別なトレーニングを受けたクラウンが病院を訪問し病気の回復を促進するプログラムを創り上げたビッグ・アップル・サーカスのマイケル・クリステンセンなどがいる。

歴史を紐解いていくと、クラウンの役割が明確になってくる。クラウンの本質「道化性」が引き起こすこととして、次の事が挙げられるのではないだろうか。

① 価値観の転換、秩序の転換―宮廷道化師が君主に向かつて無礼なことでも自由に言えたように、クラウンは、固定化した価値観や秩序をかき混ぜ、

空気を動かすことができる。

② 遊び心、サブライズ↓想像力の刺激↓状況に応じて、クラウンの起こすサブライズ(シヨ一的要素)はそこに居合わせた人たちの創造力を刺激する。

③ つなぎの役割↓信頼関係の構築―言語・非言語メッセージを巧みに操り(クラウンニング)、相手とのコミュニケーションを図る能力は、時に合い対立するものの中に入り緩衝液の役割を果たす。人同士をつなぐきっかけを創り、信頼関係の構築へとつながる。

④ 即興術↓抑圧からの解放―クラウンの持つ即興術に巻き込まれると、抑圧されていたものが解放されるという状況がよくある。それは自然的に発生し、自覚していなかった自分自身と遭遇する。時に内に秘めた道化性が表出されることもある。

福祉に働くクラウン

病院や施設を訪問するクラウンの名称と定義について説明する。日本においては、クリニクラウン以外は明確な概念や定義は定まっていない状態である。

一、病院・施設訪問をするクラウン

・クリニクラウン

主にヨーロッパで使われている名称。対象は〇―十八歳までの入院中の子どもに限られ、訪問先は原則として病院。日本では臨床道化師とも呼ばれる。

・クラウン・ドクター

ニューヨークのビッグ・アップル・サーカスの創始者マイケル・クリスチャンが創始したクラウン・ケア・ユニットのクラウンの呼び方。医者白衣をクラウン風

アレンジした上着を着て病院訪問をするようになったことから、クラウン・ドクターと呼ばれるようになった。

・ケアリング・クラウン

クラウン・キャンプの創始者、リチャード・スノーバーグが使い始めた言葉。活動範囲は病院だけにとどまらず、老人ホーム、孤児院などの福祉関連施設の他、障害者の方のさまざまな地域活動参加の援助方法としてもクラウンを取り入れた。一般の人でも適切な教育でクラウンになれる道を拓いた。

・ホスピタル・クラウン

ケアリング・クラウンの活動が徐々に広がりを見せはじめ、情報を共有し合う必要性を考えたシヨーパーナ・シェブカが「ホスピタル・クラウン・ニューズレター」を発行し情報共有を行うようになった。発行から十年以上が経過しホスピタル・クラウンという名称が馴染み、アメリカでは特定のトレーニングを受けていない病院訪問するクラウン全般を指してホスピタル・クラウンと呼ぶ。だが、特に活動の概念や展開方法論が定まっている言葉ではない。

二、自然災害の被災地や紛争地を訪問するクラウン

・アンバサダー・クラウン

パッチ・アダマスがはじめた使節団「Clown 1」や世界九カ国に存在する「Clown Without Borders」がある。

日本にクラウンは必要なのか

私は二〇〇八年三月からケアリング・クラウンとし

て病院や施設を訪問している。小児科病棟、精神科病棟、障害者病棟、老人施設と幅広い対象で訪問する機会を得て、二〇〇九月には、CWB-USAのモシェ・コーエンとともにミャンマーの被災地にも訪問する機会も得た。

日本では、クラウンの歴史が浅く、特に介護の現場ではクラウンの存在はほとんど知られていない現状がある。クラウンの説明をする時、「赤い鼻をつけて、サーカスにいる…」とここまで伝えると大抵の人から「あつ、ピエロね。」と答えが返ってくる。日本では「赤い鼻||ピエロ」そして、「ピエロ||シヨ」という公式が暗黙の了解で成立している。私たちは訪問の際、必ずシヨを行わなければならないのも現状である。

老人施設では、赤い鼻をつけ派手な格好をして面白おかしくシヨをすれば、たいていの場合、喜ばれ感謝される。しかし、面白いシヨをすることだけが必要とされるならば、別にクラウンでなくてもいい。有名人の歌謡シヨやマジックシヨで十分である。ではなぜ「クラウン」なのか。「ホスピタル・クラウン」「ケアリング・クラウン」はシヨをするだけの存在ではない、ケアをする存在である、とするならば、高齢者に対してはどのような役割で存在するのか。

日本の高齢者にはクラウンという歴史が存在しない。彼らにとって赤い鼻に派手な格好のクラウンは未知なる存在で、全く新しい存在なのである。つまり、実際には、私たちクラウンは高齢者にとって受け入れられにくい存在なのではないかと思う。認知症の方へクラウンングを試みた時、一人の男性突然、激怒し始めた。「赤い鼻なんて、みっともないことをするな。」と大声で叫び始めたのだ。立ち上がって殴りかかろうとさえした。クラウンの歴史がないことを痛感した一瞬だった。

一方、クラウンの持つ非言語的メッセージを巧みに使える技と即興性は、時に極めて有効に機能することも確かではある。

だが、歴史のある欧米においてさえも、クラウンが訪問の対象にしているのは、そのほとんどが子どもであり、高齢者を対象にした実例報告は少なく、私たちもまた経験が浅いため残念ながら「証拠」を見出すことはできていない。

現場に働くものの変化

しかし、一年半近くクラウンとして訪問を繰り返していく中で、一つだけ確信したことがある。それは、現場で働くスタッフの変化である。

ケアの現場には無数の「やってはいけないルール」や「やらなくてはいけないルール」が存在する。そのルールは、時に利用者の命にも関わることであり、常に上層部は現場スタッフを管理し、現場スタッフは利用者を管理している。

安全性を重視しすぎるがゆえに起こる、異常な管理体制。そこには笑顔や笑い声はなく張り詰めた緊張感が漂う。ケアを行う範囲の広さ・深さ・責任の重さにより、現場スタッフの心的エネルギーを消耗してしまふことは避けられない。志高くしてケアの現場に入ってきた人ほど、現実の厳しさに極度の身体的疲労と情緒・感情的疲労を引き起こし、燃え尽き現場から去っていく。そんな現場に「道化性」をもつクラウンが入りこむと、確かに場が変わっていくのである。

クラウンはやってはいけないことばかりを行う「おバカ」な存在である。日々張り詰めた緊張感が溶けて

いく。受け入れられにくい存在ではあるが、遊び心が満載なクラウンが接することで、高齢者の表情が変わり、今まで見ない子どものような生き生きとした反応が返ってくる。スタッフは驚く。

やってはいけないといわれていたことが、実は高齢者のケアに効果的に働くとかかると、スタッフは多面的な考えが持てるようになり、ケアにも余裕ができるようになってくるのである。また、クラウンの即興術に巻き込まれたスタッフは、時に自分自身の道化性に気づくことがある。自分自身の道化性を見出したスタッフは、皆のびのびと仕事ができるようになり、のびのびとリラックスした状況下でのケアは高齢者やその家族にまで心地良い雰囲気を与えることができる。

八月七日は「ハチナナ」で日本記念日協会の認定する「あかいはなの日」である。この日に私は、定期訪問している老人施設のスタッフと利用者の鼻をドウランで赤く染めてまわった。勤務中のスタッフは、染められることを嫌がるだろうと予測していたが、驚くことに、ほぼ全員が赤い鼻を受け入れ、赤く染めたまま仕事をしていった。鼻が赤くなった瞬間、皆の顔は必ず笑顔になり、赤い鼻を楽しんでいた。

日本の介護や福祉の現場、「ホスピタル・クラウン」や「ケアリング・クラウン」の必要性、特に高齢者にとつてのそれは、まだまだ検討するべき課題の多いところではあるが、現場スタッフの変化を目の当たりにする機会を得て、介護や福祉の現場でのクラウンの新しい可能性を、私は強く感じている。

（かしまひろみノ認知ケア専門士・
ケアリング・クラウン）

クラウン・ワークショップのご案内

2010年3月13日（土）、14日（日）、ならびに16日（火）、Clown Without Borders アメリカ代表モシェ・コーエンの「ユーモア」ワークショップが東京で開催されます。

「タオイスト・ヘルス・エクササイズ」や「フェルデンクライス身体訓練法」などを取り入れたユニークな手法も取り入れています。クラウンを目指す方だけでなく、教育・医療・福祉・サービス業など、人と接する職業の方もご参加ください。参加費、会場など、詳細については次のメールまでお問い合わせください。

hiromiulala@gmail.com



自閉症スペクトラムの子どもたちとドラマ

加藤 明子

オレゴン州ユージーンで

国語、算数、ソーシャルスキル、ライフスキルを教える新設の私立特殊支援学校に、九月から教員として勤めている。親組織は、自閉症スペクトラムにある子どもたちを持つ保護者たちが、自分の子どもを育て方に悩み、お互いのサポートをしようと立ち上げた非営利法人である。児童は今のところ、偶然にも（九才児童に自閉症が多いのは偶然ではないと考える保護者もいるが）全員九歳の男子（伝統的自閉症スペクトラム診断率男四対女一を反映したともいえる）である。自閉症スペクトラムの特色に加えて、あるいは特色の一部である、自傷・他傷行為、発語による意思疎通が図れない、トイレ使用が完璧でないなど、さまざまな特色を持っている児童がいる。保護者や地域の教育委員会が公立学校で「面倒をみきれない」と認めた時に、子どもたちを送り込んでくるので、子どもたちの出入りは学年途中でも頻繁である。私自身がドラマ教育の資格を持ちあわせていたことから雇用された経緯があり、特殊支援教育で後回しになりがちな、創造性の伸張も期待されながら、児童に、つねられたり、嘔まれたり、ひっぱたかれたり、優しく抱きしめられたり、頬にキスされたりしながら、毎日学習指導や生徒指導を行っている。

ドラマ手法を使うなら

基礎学力、ソーシャルスキル、ライフスキルを教える目的で、ドラマの手法やドラマ教師や俳優として受ける

トレーニングが役立つ場面は多いと思う。特にロールプレイは、適切な会話への参加、怒りの制御、お礼や謝罪などのソーシャルスキルや、バスの乗り方、道路の渡りレイは、適切な会話への参加、怒りの制御、お礼や謝罪などのソーシャルスキルや、バスの乗り方、道路の渡り方などのライフスキルでは、必須の手法である。

教える者は、動きを細かなステップにわけ、各ステップを口でシンプルな表現で説明しながら、見本としてみせ、模倣させる。自然に起こる動きを意識して分析し、自ら正確に再現しながら、口頭でも説明ができ相手に伝達することが、指導者の条件となるわけだが、ドラマのトレーニングに非常に似たところがあると思う。基礎学力についても、指導の流れは同じといつてよいだろう。何度も「リハーサル」のように、マスターするまで、繰り返し同じ事を練習するのである。

アスペルガー症候群の研究者トニー・アトウッドも、脚本があつて（話す言葉が決まっているという意味である）、場面も現実の世界に近いものが設定できるドラマは、自閉症スペクトラムにある人たちの、感情、コミュニケーション、社会性の発達を促していくのに、とても有効な指導の手法であると言っている（二〇〇九年七月米国ポートランドでの講演にて）。演技や演劇手法を使ってソーシャルスキルを学ぼう！と高々とタイトルにかかげて、ドラマ教師が執筆した本も評判が高い。そこには自閉症スペクトラムにある人たちが苦手とするため、サプライズもテンションが見られず、ドラマではないとも言えるが、少なくとも、児童生徒たちが生きて

行く上で必要な様々なスキルを習得するために、ドラマのトレーニングや手法がおおいに活用されることはまちがいない。

創造性を伸ばす芸術としてのドラマ

私の勤務校の親組織は、地元の五百席のホールを借り、舞台発表会を二年続けて行っている。ドラマと言えば、やはり劇をひとつ作り上げて舞台にのせ、保護者や友人に鑑賞してもらおうとのことであろう。学校はこの九月に設立されたばかりだし、保護者が同意しない、個別教育計画に含まれない指導内容は行えないという理由からも、芸術としてのドラマの授業を盛り込むことは、十分な計画とスタッフや保護者、管理職との合意があつてのみ実現するという制約がある。しかし、今学校では、ハリポッター大好き少年が、衣装も持っていて台詞やスペルを完璧に暗唱する。コミュニケーションと文法をさらに学習中の少年が、突如、間仕切りカーテンを締めて、ホワイトボードに、「レディイス・アンド・ジェントルマン、ブリッジウェイ、ジョン・ヤング（仮名）、ダンス！」と正確に綴り、カーテンを空けて、書いた通りアナウンスして、踊る。メイクビリーブ（make-believe）遊びの世界がすでに存在する証拠であり、ぜひ、個性を活かした劇をやつて見たいと、考えている。

自閉症スペクトラムの特色を考慮して

学校のスタッフのひとり「校歌」を作曲したので、それをステイミユラスとして、来年四月の発表会に向けて小さい作品を紡いでみたいと考えている。その際、頭に浮かぶことがある。自閉症スペクトラムの特色（特に社会性の発達、つまり人との関わり方の違い）と、ドラ

マ、演劇という言葉から私たちがおそらく思い浮かべるイメージ、演技やドラマが成立する要素や学校で行われる学習発表会で劇を行うことにまつわるものと、一見相容れないのである。また、ひとりひとり特色の程度が違い、ひとつのことを学ぶのに、だれにでも共通する万能手法を見つけることは難しい。が、解決する道を探ってできそうなことも多い。

具体例をあげてみよう。

1 エコレイリア(echolalia)―先に聞いた言葉や文の鸚鵡返しは、重要な特色のひとつである。質問に対して、答えずにその質問を聞こえた通りの言葉と抑揚で繰り返す。普段のコミュニケーションが言葉で成立しにくい者でも、何日も前にどこかで耳にした映画の台詞を正確に完璧に発することがある。ドラマのダイバインジングを考える時、会話を成り立たせることや、台詞を使用することに、大きな工夫が必要である。

2 音、光、において、皮膚感触―蛍光灯の点灯が見えてその雑音とともに集中を妨げる。相当な音量があっても大音量と気づかない。馴染んだ木綿の衣類しか身につけたがらない。大掛かりで変化が頻繁な照明、音楽、衣装、化粧は極力避けることが必要かもしれない。

3 アイコンタクト―普段の生活をしながら、場面や状況に即して自然なアイコンタクトをとるようになることは稀。具体的な言葉などによるプロンプトと模範提示、繰り返しの訓練が必要である。

4 感情の読み取りや表現―何が今「悲しい」を引き

起こすのか、体や顔、声の何が「悲しい」を示すのか、どの言葉と「悲しい」が結びつくのか、どの目の形、どの口の形を作れば「悲しい」を表せるか、どうやったらその形を作れるか、他の人を見て「型」を模倣するように言うだけでは、習得されにくいスキルである。また、「型」を修得しても、実際に感じるようになるかは、私には未知である(ドラマでは実際に感じる必要はないかも知れないが)。動きや表情を細かいステップにわけ、具体的な言葉とビジュアルな補助、繰り返しの練習が必要であろう。

5 プロソディ(prosody)とイントネーション―適切な場面で適切な音量、声の高さ、話す速さ、自分の発する単語や文の、また相手の発する言葉と自分との間のとりかた、言葉の抑揚などの点で、独特である。身近な大人やお気に入りのビデオで聞いたそのままの言い回しを記憶して、それを使って発話するようである。さて演技、となった時、場面に合わせた抑揚や音量、話す速さなどは、理由説明、模範提示、繰り返しの練習により習得できると思われる。

6 想像の世界に身をおくこと―自閉症スペクトラムにある人が、多分一番苦手とする部分である。ドラマのこのメイクビリーブ、「○○さんになったつもり」や「×××に行ったつもりで」は、自分は自分でしかありえない彼らにとつては理解しがたいであろう。また、ドラマが現実ではないことを理解納得させるにも、教員、演出家の指導配慮が必要だろう。役の名前を使わず、自分の名前を演技する、自分の現実に住む世界に近い内容でドラマを紡いでいくなどの方法が先例にある。

7 運動能力と脳の機能―耳や目から入った情報が脳に届き、処理されて、脳からの指令が四肢や指、顔に達し、実際に動くまでの回路に違いがある。実際に、体や顔、口が動くまで、時間がかかること、期待されるものとは違った形の動きになることが考えられる。障害児に共通した特色であるとも言えるかもしれないが、筋肉の発達状況も違い、配慮はもちろんのこと、特色をいかした演技も可能だろう。

舞台発表会の運営の担い手は、子どもの一番の理解者としての保護者である。音楽は、組織に属する音楽療法士が担当、演出には地元の演劇関係者を招聘することもあるようだ。幕前の、「携帯電話の電源は、サイレントモードではなく、完全にお切りください」などのお願いは、自閉症スペクトラムを持つ出演者の特色が理由として考えられる。鑑賞のポイント、「出演者ひとりひとりの言葉をよく聞いてほしい。創造の精神を感じてほしい」も説く。

発達障害のみに焦点があたるのではなく、その障害をマネージしながら、創造性を育てる、そんな気持ちで、私も、毎日の生活を、生徒と送っていったら良いと思う。冒頭の個々の児童の特色と、上記で述べた自閉症スペクトラムにある者の特色をふまえ、どんな工夫ができるのか、私自身も―予測できないがゆえに―非常に楽しみである。

(かとうあきこ／米国オレゴン州ユージーン在住・ブリッジウェイスクール教員)

メディア・アリテラシジー、シニイズンシップ

ー ICT、そしてドラマ教育ー C&T の挑戦

中山 夏織

東京と広島でのひとつのプロジェクトを終え、何か不思議な感を覚えている。まだうまく整理できていないが、ひとつには東京分を「あうるすぽっとアートマネジメント研修生プログラム」のなかに投入したため、招聘者でありながら、自身が主催の任を負わないという二重構造があったからであろう。また、これまで私どもが担ってきたドラマ&シアター教育とルーツを同じくしながらも、一線を画するものだったからかもしれない。

一九八八年に設立された地方の小都市ウースター（ウスターソースの故郷！）に拠点を置く TIE 劇団 C&T が、イングランドを代表する ICT を駆使したネットワーク型の演劇組織に変遷していく過程は、演劇を取り巻く、文化政策のみならず、社会・経済の変化、そしてそこに生きる青少年の生活の変化を、演劇人としていかにとらえ、いかに対応していくかの選択を、通訳としてだけではなく、英国演劇と文化政策の研修者として興味深くトレースさせてもらった。だが、ここでひとつ疑問を抱いたのは、現在の C&T を、助成団体のイングランド芸術評議会が「プロの演劇活動」として認知しているということだ。どういうことかというところ、ネットワーク型組織に転換して以来、C&T が一般的な演劇公演を実施していないからである。

芸術監督のポール・サットン は公演を一切やらないわけではないと言明しながらも、その必要性をいまは感じ

ていないという。そのために通訳としては、彼と一緒に来日した若千十九歳のアシスタント・ディレクターを「演出助手」と訳すものか悩むわけだが、そんなこと以上に、演劇のあり方が大きく変遷している、それを文化政策も受容する時代が到来したことを思い知らされた。ポール・サットンのポリシーは明確だ。ドラマ教師としての資格、伝統的な TIE の伝統を担いながらも、「デジタル・ネイティブ（生まれながらのデジタル世代）」に語りかけ、ともに活動を展開するには、彼らの言葉であるデジタルが媒体にならなければならないという。演劇のライブ性を否定するものではないが、青少年の馴染んでいるデジタル媒体が取り込まれる。ちなみに、私たちの世代は、「デジタル・イミгранト（デジタルの世界に紛れ込み、戸惑う移民）」とのこと。納得。

今回紹介された「リビングニュースペーパー」プロジェクトは、青少年をとりまく社会の「不正」を、ニュースソースからピックアップし、C&T が提供する五つのルールをもとに、ドラマ手法で作った作品を映像化し、狭くその場に居合わせた観客だけと享受するのではなく、C&T のウェブサイトに YouTube などを使用して、広く遠い他者たちとコミュニケーションができるようにするものである。ポイントは双方方向の議論、コミュニケーションを生むベースにドラマを活用するという点にある。

だが、何より興味深かったのは、最新のデジタル媒体を駆使しながらも、背景にあるテーマや理念、ドラマ手法は、泥くさいまでに、ドラマ教育の、TIE のそれだったことである。実のところ、私が不思議に感じてきたものの根幹はこのズレが生む違和なのだと思う。

だが、通訳として少し戸惑った。というのは、現在の青少年に「Injustice（不正）」や「Agitate（扇動する）」「Jovialty（忠誠心）」といった言葉が届くのか。辞書にでてくる訳語では、どうも時代に即さない、届かないのではないかと、様々なことばに移し替えてもみた。だが、そもそも「シニイズンシップ」の概念の乏しい日本で、しかも、社会・経済的には勝ち組のみにいて、集団的行動をよしとしない青少年たちに概念そのものが理解されるのか。一方で、泥くさく古臭いとはいえず、テーマには普遍性がある。通じないから伝えないのではなく、だからこそ、彼らの言葉としてのデジタルを駆使して伝えることが必要なのだという構造も見えてきた。

だが、青少年には語りかける媒体があるものの、問題なのは、演劇人に語りかけることが難しいという現実である。ドラマ教育も TIE もその壁にぶつかってきた。メディア・アリテラシジーも、シニイズンシップも上演作品やワークショップのテーマにのぼっても、本質的に自分とは無縁だと思っている、あるいは、その概念すら知らない演劇人は少なくない。小規模ながらも、C&T が演劇界に投げかけるものは決して小さくない。

改めて演劇とは何か、と自問するにつれ、歴史の針を少しばかり戻したくなる。演劇が社会性をもっていた時代に。そのためにはデジタル技術が必要？

（なかやまかおり／プロデューサー／
ドラマ教育アドヴァイザー）

青少年の未来とアートマネジメント 「学校と芸術をつなぐ実践ストラテジー」報告書

特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク (TPN)

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンクを目的としています。2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

theatre & policy シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行（隔月間・年6回）されています。定期購読をご希望の方は、TPNの準会員としてご参加下さい。年会費3千円（送料込）を下記までご送金下さい。尚、送金の際は、ご住所・氏名・電話番号を忘れずにご記入くださいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座 00190-0-191663
加入者名 シアタープランニングネットワーク

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク
編集人 中山夏織
発行人 高山敦司

〒182-0003
東京都調布市若葉町1-33-43-202
TEL (03) 5384-8715
FAX (03) 5384-8715
tpn1@msb.biglobe.ne.jp
http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn

2009年8月、ロンドンの有名非営利劇場リック・ハマスミスからアダム・コールマン氏をお迎えして開催されたアートマネジメント・セミナーの記録を中心に、青少年の未来のために劇場が果たしうる役割を紹介。劇場を地域のクリエイティブ・ラーニングセンターとして、またリスクにさらされた青少年と職業訓練の場に変身させる現在進行形の一大プロジェクトが紹介されています。芸術の社会的機能のみならず、芸術組織論、クリエイティブ産業論、リーダーシップ論としても貴重な資料。

「青少年の未来とアートマネジメント」(2009年12月25日発行)
A5判 68頁 頒布価格 800円(送料込、但しメール便)
編集・発行 シアタープランニングネットワーク

頒布ご希望の方は、部数をご記入の上、ご送金くださいませ。
郵便振替口座 00190-0-191663
加入者名 シアタープランニングネットワーク

助成  日本財団
The Nippon Foundation

編集後記

NPO法人としてのシアタープランニングネットワーク活動がこの12月、10年目に突入しました（会計年度としてはすでに4月から10期目ではありますが）。設立当初、10年後という未来を思うことはまったくなかったのが、不思議と言えば不思議な気がするのですが、発展しなければ成功しなければならぬと気負うこともなければ、未来を規定・限定してこなかったことがむしろ続けてこられた要因なのかもしれません。

マクロとミクロの視点を交錯させながら、ステレオタイプな概念を廃して、いま私たちにできることを、いま私たちがやるべきことを、ただ奇をてらうことなく、地道にやってきたという自負が、この10年という時間を支え、彩っているように思います。また、多くの方々に出会い、支えられ、ときに悩まされることのあった10年でもあります。メンバーの入れ替わりもありましたが、一期一会、一人一人の方の人生のある「時期」にシアタープランニングネットワークが存在しえたということを誇らしく感じるものです。

今後ともよろしく願い申し上げます。

いま日本の芸術、そして文化政策は、政権交代がもたらした「事業仕分け」の荒波にそのアイデンティティを脅かされています。この国では経済でしかすべてを理解することはできないのだということを改めて思い知り、打ちひしがれてしまっています。あの1990年の「芸術支援元年」はバブルの幻影に過ぎなかったのでしょうか。だからこそ芸術と社会との関係性を、社会貢献ということだけでなく、また芸術性ということだけでなく、複眼的に考えていかなければと思う師走です。

来るべき年が皆様にとりまして、幸せで満ち足りた文化的なものでもありますように。

(中山夏織)